

第一話 魔法使いがやってきた！

僕がその、事件というか事故というか、どちらかと言えば事実に近い出来事に遭遇したのは、地下鉄に乗って繁華街へ向かおうとした時のことだった。僕が住んでいる、この一大都市である名古屋市の繁華街というのは、言わずもがな、栄であった。栄というのは名駅——つまり名古屋駅のことだ——からはバスや地下鉄で一本で行けてしまうのだけれど、僕が住んでいる場所からだと最低一回の乗り換えが生じてしまう。そういう訳で乗り換えをして、名古屋市をぐるりと一周している紫のカラーリングをしている地下鉄、名城線に乗り込むためにホームへ降り立った時のことだった。時刻は確か午後一時二十六分だったと思う。何故その時間を覚えているかと言えば、ちょうど電車がやって来たタイミングだったからだ。日本の鉄道は、JRだろうが私鉄だろうが、基本的に正確にやって来る。だから、時間を覚えていたという訳。

『間もなく、栄・大曽根方面、名城線右回りが参ります。黄色い点字ブロックの内側にお下がりください』

そんな自動放送を聞いて、僕はそろそろ電車がやって来るなど思いながら、列に並んでいた。普通、日本人はドアが開く位置で二列に並んでいる。それは他の国ではあまり有り得ないことだって、インターネットで見たことがある。インターネットの知識は何処まで正しいかどうか分からないけれど。いずれにせよ、僕を含めた大半の人間は列を成して電車が来るのを待っていた訳だ。遅れは全くなかったはずだから、あまりイライラしている人は居ないように見えただけだ。

と、ふと列の先端の方を見ると、一人の男性がホーム端を歩いているのが見て取れた。確かにホームは人でいっぱいだから、混んでいるところを通るよりかはそっちの方が良いのかもしれないけれど、しかしながら、そこを歩くのは正直安全性が確保されていないので意味がないと言える。多少混んでいてもホームの中心または壁際を歩いていた方が遥かに安全だからだ。実際問題、僕はそんな危険を伴う行動を取りたくない。取る必要も無いし、取る意味も無いし、取るメリットがないからね。

さて、それはそれとして、その人間についてだが——特にふらついている様子もなく、のんびりと歩いている様子だった。

中肉中背の男だった。

恐らく半袖のシャツに、オープンシャツを羽織っている。

背中にはリュックを背負っていて、何だか重そうだ。まあ、それ以外は特筆すべきこともないから、僕はただスマートフォンを眺めながら電車が来るのを待っていた訳だけれど――。

叫び声が聞こえて、僕は直ぐに視線を戻した。

何が起きたのか、と耳を傾けると――。

「誰か駅員呼べ！」「いや、それよりもホームに上げた方が良いのでは？」「馬鹿、そんなことしている暇なんてあるかよ！」「非常停止ボタンを押すべきだろ！」「間に合わねえよ、そんなこと言っても！」

そんな言葉の洪水が耳に容赦なく押し寄せてきた。僕は訳が分からないので、前に歩くことにした。既に人だかりが出来ていて、前方の列の人間はそういう声を上げている人も居れば、スマートフォンを線路に向けて写真や動画を撮影しているような人も居る。SN Sが流行しすぎた結果か。しかし、いったい何が起きたのかと思って、僕は人の柱を掻い潜りそちらを見てみると――線路の上に人が倒れていた。どうやら、さっきホームの端を歩いていた男のようだった。これは不味いだろ、どう考えても。急いで駅員を呼ぶか、緊急停止ボタンを押すかしないと不味いだろ。そう思って、どちらが早いかを考える。しかし、それよりも早く、電車のヘッドライトがホームを照らし出した。

ホーム端に詰め寄る人間を威嚇するかの如く高い警笛ホーンを鳴らして、電車が駅構内に侵入する。運転手が線路上に横たわって動かない人間を見つけて、何度も警笛を鳴らすのが、全く動かない。同時に、線路と車輪が摩擦してキィキィ音を立てながら電車が急激に減速していく。しかしながら、それでも間に合わない。あわや大惨事——と思わず目を瞑りたくなってしまうた、その矢先。

僕の一步前を、一人の少女が通過した。

赤いツインテールをした少女だった。そしてフリル付きの真っ赤なドレスを身に纏っていた。何というか、その少女を一言で言えば『赤』と言わざるを得ないようなそんな感じの少女だったのだけれど——そして、あまり必要ない情報を言うならば、僕と近い年ぐらゐの少女に見えたのだけれど——しかし、少女は僕達のような動こうとして動けない人間や今の状況を楽しんでいる観客と混ざり合っている人々の集合から一步前に出て、両手を合わせた。

それだけだった。それだけのことだったのだ。

刹那、極端に音が低くなった。

どんな音が、と言われたらこう答えるしかない。

全ての音が、だ。

ホームの階段前で聞こえる、視覚障害者に階段であることを報せる電子音（言ってしまうと、その電子音と電子音の間隔も心なしか長く感じた）、向こう側のホームに居る人々の叫び声、電車が鳴らす警笛、全ての音が低くなっていた——と思っていたが、僕の周りに居た何人かの人間も、僕と同じ違和感を抱いていたようで、何が起きているのかさっぱり分からない様子だった。いったい何が起きているんだ、とそんな感じだ。

そう僕含め多くの人間が呆気にとられていると、少女は踵を返した。

「そこ！ 急いで、線路に倒れている人を助けなさい！」

何人かを指して、そう言った。少女の言葉を聞いて人々は訳が分からない様子で、それぞれの顔を見比べていると——。

「良いから、早く！」

完全に少女に圧倒されているようだった大人は、急いで倒れていた男を引きずり上げる。そして上げ終わったのを見たタイミングで、彼女はポケットから砂時計を取り出していた。青い粒状の砂がさらさらと下に落ちていくのを見て、彼女はほっと溜息を吐く。

そして、安全になったのを確認して、彼女は右手を挙げて、指をパチン、と弾いた。それと同時に、世界が元に戻った。

階段を報せる電子音、人々の叫び声、警笛、全ての音が元に戻っていた。

そして男が倒れていた場所をゆっくりと通過していく電車。運転手の冷や汗をかいた、世界が終わってしまったような表情は忘れることが出来ない。

僕は呆気にとられていたのだけれど、そういえば彼女は、と思って再び彼女に視線を移すと、彼女はもう居なくなっていた。

そして、それが僕こと間宮和史と魔法使い黒津クレアとの出会いだった。



僕の通う中学校は至って普遍的な中学校であった。

地下鉄の駅が最寄りにあるし、バス停も近くにあるから交通の便は悪くない。そもそも名古屋自体が車社会だったりする訳で、公共交通機関を使うよりも自家用車を使うケースが多かったりする訳だけれど。

しかし、今日だけは違っていた。

いつも変わらない中学校だったけれど、今日だけは違っていたのだ。

その『違い』を作った原因となったのは、昨日僕が立ち会ったあの事故——正確には未遂か——だった。

SNSでも『突如現れた赤ずくめの少女が命を救った』だの『時間を操ることの出来る少女が現れた』だのどうでも良いトピックスで満載だった。そんなトピックスなんて、正直どうでも良かった。僕にとっては、普段の一日の動きに支障が出ないと思っているから。それが当たり前のシステムに何かを齎すというのなら、それはそれで有りかもしれないけれど、それでも、僕はその『魔法使い』のような少女について、少し考える時間を与える暇すらない、と言った状態だった訳だ。

教室に入るとクラスメイトがざわついているのが感じられた。少し聞き耳を立ててみると、やはりというか何というか、話題はその少女のことで持ちきりとなっていた。その事故はどうやって防ぐことが出来たのかだとか、その少女はいったいどんな絡繰りを使ったのかだとか、その少女はいったい何者なのかだとか、まあ、色々な話題が出ていた。僕としては、そんなことどうでも良いと思っていたので、早々に自席に着席して、一つ溜息を吐いた。僕が座っている席は、窓側の列の後ろから二番目だ。しかし、正確には、一番後ろの席は空席となっているため、僕の席が実質一番後ろになっている訳なのだけれど。

「なあ、カズ。昨日の事故、知ってるか？」

座ったタイミングを見計らって、僕の前から声が聞こえてきた。

その正体は前に座っているクラスメイト。

それでいて、唯一の友人——この場合、友人とは名前と顔が一致している存在のことを指す——であった伊野啓介だった。啓介はどちらかというところあまり学業に励んでいない人間だ。部活動は交通研究部という、少々辺鄙な部活動に所属していた。僕も暇な時は足を運ぶのだけれど、正式な部員とはなっていない。

「事故、って何のこと？」

「おいおい、冗談きついで。ツイッターで知ってるだろ？ トレンド一位にもなってたし、テレビのニュースでも流れてたぜ、『赤い魔法少女』の話題」

へえ、そんな名前で呼ばれるようになったのか、彼女。

と、彼女のことをまったく知らないくせに知ったかぶりをして僕は話を聞いていた。

「ああ、聞いたことがあるような、ないような。で、その彼女がどうかしたのかい」

「何でも、その魔法少女は、魔法都市からやって来たんじゃないか、ってネットでは話題になってるんだよな、確かにこのご時世ならそうなる可能性は充分にあるけれどさ」

魔法都市。

確か、奈良県の山奥に存在する都市だった気がする。

名前は明確には与えられておらず、遙か昔より魔法のことを研究していて、近代に入っても日本政府と協力しながら魔法の使い方について考えている場所、だと思う。

どうしてそこまで知っているのか、ということについては、中学の社会の授業で詳しく魔法都市について学ぶからだ。中国で言うところの香港やマカオに値する場所だとされているらしいし。

「魔法都市から人材を流出させることは避けられている、なんてことを学ばなかったか？」
「確かにそんなことを学んだ記憶があるけれど、でも限界はあるだろ。普通の人間が、外の世界に興味があるのに、外に出させてくれないなんてことあるかよ？ 俺なら必死に抵抗すると思うがね」

「そういうものかな……。ん、でも、やっぱりその辺りは上野人間があれやこれや考えてるんじゃないのかな。詳しいことはさっぱり分からないけれどさ」
「いや、どうだろうな」

チャイムが鳴って、同時に先生が入ってくる。黒いセミロング、眼鏡をかけた女性だ。四十代ぐらいだと思うが、先生自体は年齢を明かしたことはない。そもそも、女性に年齢を聞くなんて御法度なんて言われかねないしな……。ただ、一言だけ言っておきたいのは、その先生は別に若作りをしている訳ではなく、どちらかと言えば自然体で過ごしている点だ。それについては、その先生の生き方というかやり方というか考え方というか——それに近い何かがあるのかもしれない。

それに、僕としてはあまり関わるつもりもないから言わないでいるだけだし、それを等しく皆思っているからこそ、普段誰も口にしらないのだろうけれど。本当に、このクラスはよく出来ていると思う。普通の中学生と思いきや、大人ぶった価値観の人間が多いと言え
ば良いだろうか。

教壇に移動していった先生は、こちら側を向いて話し始める。

「皆さんに一つご報告があります。具体的には転校生です」

転校生、という単語を聞いてざわつくクラス。それと同時に、僕の中では少しだけ違和感を抱いていた。それは、何故このタイミングなのか、ということだった。今日は四月下旬、とどのつまり一学期が始まったばかりなのである。つまりどういことかと言うと、もう少しスケジュールをずらせば四月上旬で最初から一緒に始められたのではないか？ という点だった。家族の仕事の都合、にしても中途半端な気がするし。

「まあ、取り敢えず先ずは、紹介した方が良いでしょう。クレアさん、入ってきて」

クレア？ もしかしてハーフか外国人なのか？ 僕はさらに気になっていった——と同時に、何処か胸騒ぎを覚えた。どうして胸騒ぎをする必要があるのか、何か身体が危険信号を送っているのか——なんて考えていたのだが。

その意味は、直ぐに判明することになる。

引き戸を開けて、中に入ってきたのは、赤いツインテールをした少女だった。制服の色に似つかわしくもないその髪は、見る者全てを圧倒させた。最初、バリバリのヤンキーか何かじゃないかなんて思ったけれど、元号も変わったこの時代じゃ、その単語も死語になりつつあるのだが。——いや、そうじゃない。そういう問題じゃない。僕は、彼女を見たことがある。そして、それは何人かのクラスメイトもそう思っているようだった。

少女は先生の横に立ち、無言で黒板に向かうと、そのまま何かを書き始めた。それが名前であることに気づくまで、僕達はただ彼女の行動を監視し続けるだけだった。無音となった教室に、チヨークの音が鳴り響く。カツ、カツ、という音が鳴り響いているだけなら、その教室は授業が行われているだけだろうなんて想像するかもしれないが、しかし実際にはその予想を超える珍妙な空間になっていた。

書き終えると、チヨークを置いて、そして踵を返す。

『黒津クレア』

達筆とはお世辞にも言えないような丸っこい字で、そう書かれていた。

少女——クレアは表情を一つ変えることなく、告げた。

「私の名前は、黒津クレア。……よろしく」



一言で言えば、その後クレアとクラスメイトの仲が親密になるはずがなかった。——当然と言えば当然の帰結かもしれないけれど、しかし、実際問題、それは余所者に対する差別か何かじゃないかなんて勘繰られてしまうのも確かだろう。しかしながら、それは断じて違うと言っておく。それだけは有り得ない。それだけは考えられない。何故なら——彼女は明確に拒絶したからだ。このクラスの全ての存在を、明確に拒絶したからだ。

ある例を提示しよう。

最初は、やはりというか、何というか、普通に人が群集する状態が続いていた。まあ、物珍しいってこともあったんだと思う。

外国人のような見た目に、外国人のような名前——日本人とは何処か違う感じがあったように思えた。しかしながら、その全ての問いに彼女は、「興味ないから」と一言で蹴り上げてしまった。そして、それ以上の会話を発展させることはなく、一人、また一人と人が居なくなっていく——最終的には誰も居なくなってしまった。仕方ないと言えば、仕方ないのだけれど。

そして、彼女の授業態度にもそれは露呈していた。彼女はずっと教科書を読んでいる、至って真面目な生徒かと思いきや、それをスケープゴートにして、何やら分厚いハードカバーの本をひたすら読んでいるのだ。

何故それを知っているかというのと、プリントを配る時に後ろを向いたら、その様子を目撃してしまったからだ。——ああ、言い忘れていたけれど、クレアは僕の後ろの席、つまり、窓側の列の一番後ろになった。そこが空席だったから都合が良かったのだろう。御陰で僕が彼女のお世話係みたいになってしまったところはあるけれど。先生も少しは面倒な生徒だと思っていたのかもしれない。

で、それを面倒なことが起きないように、あまり先生と交流を持っていなかった僕に押しつけた、と。

成る程、ひどく合理的な考えだと思う。しかしながら、やはり厄介な生徒を生徒に押しつけるのは何処か間違っているような気がするぞ。それだけは否定しておきたい——なんて思っていたら数日もの時間が流れてしまっていた。

この学校は昼食は弁当を食べることになっている。弁当がない生徒は一階にある購買でパンを購入するか、事前に予約しておいた弁当を購入するというやり方だ。僕は諸々家庭の事情を考慮して、弁当を事前に予約しておくやり方に落ち着いていた。

クレアは昼食の時間になると、いつも何処かへ消えてしまう。何処へ行くのか、なんて聞こうとしたこともあった。しかし、彼女は答えないだろうと思ひ、僕の心中で思ひとどまった。まあ、実際問題、中学生というのは噂好きな連中だったりするから、もし僕が彼女に声をかけていたら、何かしらの噂が生まれるのは間違いないだろう、なんて思っていたのだけれど。

しかし、彼女が何処に向かっているのかは、何となく突き止めていた。それは屋上だった。屋上は危険だからという理由で鍵がかかっていたような気がしたのだけれど、しかしながら、クレアはそれを無視していたらしい。どういうやり方でそれを突破したのかは分からないけれども、転校早々やるなあ、なんて思っていた。絶対騒ぎになることは分かっていた訳だし。——もしかしたら、裏を掻い潜っていたのだろうか？ いや、それは分からない。とにかく、それを突き止めようと、僕は購買で弁当を受け取り——余談だが、予約した場合は事前に弁当代を支払っておくから、受け取り時には代金は必要ない——屋上へと向かった。無論、僕が見つかってしまったら、僕が何も始まらない。始まる前に終わってしまう。だから、細心の注意を払って、僕は屋上に足を運んだ。思えば、屋上に行くのは初めてのよな気がする。今まで、目立つようなことはしてこなかったからな——なんて思ひながら、僕は屋上へと続く扉を開けた。

屋上は、しん、と静まりかえっていた。

屋上ってこんなに静かだったっけ？　と思い込んでしまいうぐらいだった。というか、別の階からの声が聞こえてもおかしくないはずだったのに、屋上だけがまるで別の空間として切り取られてしまったかのような、そんな錯覚に陥ってしまう。ただ、そこで怖じ気づいていたら何も始まらない。だから、僕は――一歩前に出た。

屋上の扉を開けると、直ぐそこに彼女は居た。ペントハウスの壁に寄りかかって、何処で購入したのか分からない奇抜なパッケージに入ったパンを嚙り、牛乳をストローで飲んでいるところだった。それだけを見ると、普通の少女に見える。

「……やあ、黒津……さん」

僕は声をかける。

同時にクレアが僕の方を向く。何故ここに人が居るのか、と知っているようなそんな感じだった。僕がここに居るのが、そんなに珍しいのだろうか？　それとも、名字で呼ばれるのに慣れていないとか？　後者は――割と有り得るな。小学生の時、名字が二度変わったクラスメイトが居たのを覚えている。そいつは結局、俺のことは名字じゃなくて名前と呼んでくれと言っていたような気がする。僕はそんなにそいつとは仲良くなっていなかったのだけれど。

「あ、あの……黒津さん？ どうしたんだい、そんなに人の顔を見て」

僕の顔に何か付いているのか——なんてことを言おうと思っていたのだけれど。

「……………どうして、ここに居るの」

彼女の言葉は若干予想外の発言だった。いや、ある意味では予想していた発言とも言えるか。いずれにせよ、僕はそれについて弁解しなければならぬ、といったところだろう。ええと、と僕は言葉の始めに付け足して、弁解を始める。

「屋上に向かう様子が見えたから、少し気になって。ほら、君、クラスに慣れている感じがしなかったし」

「それを言いたいんじゃない。……ここに、人払いをかけていたはずなのに」

人払い？ 僕はそれについて反芻したが、意味が分からない。言葉通りの意味を取るならば、彼女がここに人が来ないように指示を出していた、ということになる。どうやって？ 転校して未だ数日しか経っていない、言ってしまったえば新参者の彼女がそんなことを出来るのだろうか。

「おかしい。ここには魔法を使える人間は誰一人居ないと調査しておいたはずなのに……。どうして、どうして？」

彼女は独り言を続ける。魔法という単語が出てきたことを察するに、やはり彼女は。

「やはり、君は魔法少女だったんだね。それも、この前の事故を未然に防いだ」

僕は彼女の隣に座り、持っていた弁当を取り出す。彼女はそれを見て、少しだけ距離を取った。あれ？　もしかして僕、嫌われてる？

「あなた……魔法を知ってるってことは、魔法使いということ？　私に近づいたのは何が目的？　もしかして、魔法都市から私を連れ戻しに来たの？」

「……ええと、ごめん。君が何を言っているのか、さっぱり分からないのだけれど」
それを聞いた彼女は目を丸くしていた。何だ、僕は何か悪いことを言ってしまったのだろうか？

僕はそう思いながら、気分を変えるべく、弁当の中身を見ることにした。今日の弁当は唐揚げ弁当だった。プラスティックで作られた弁当箱の中に、唐揚げが四つ、揚げ豆腐、漬物、ポテトサラダ、ご飯が入っている。バランスの取れた、とても有難い弁当だ。これで四百円、しかも大盛りは無料で出来るというのだから、弁当を作っている人には頭が上がらない。食べきれないから大盛りにはしないのだけれど。

彼女は、まさか、という表情を浮かべながら、僕に問いかける。

「……あなた、本当に魔法については何も知らないということ？　ただの一般人なの？」
「ええと、まあ……そういうことになると思うけれど」

信じられない、と言わんばかりの困惑ぶりだった。いったい僕が何をしたというのだ。小一時間問い詰めたいぐらいだ。いや、それは出来ることならやらない方が今後のためかもしれない。

弁当の蓋を開けて、割り箸を割る。そして、唐揚げを一口に入れた。揚げたて、という訳では当然ないのだけれど、しかしながら、ジューシーな肉汁が口の中に広がった。流石に学校用だからニンニクは使っていないようだけれど、その分ショウガが利いている。味も醤油ベースの味付けがされているためか、何もソースをかけなくても美味しく出来ているのは有難い。僕はそのままご飯を口に運んだ。

ぎゅるる、という音が鳴ったのはちょうどその時だった。はて、何処から鳴ったものだろうか？ 僕にご飯を食べているのだから音が鳴る訳でもない。自然から出た音とも思えない。ちうことは犯人は——と僕はクレアの方を見てみると、クレアが頬を真っ赤にして僕の方を見ていた。そのまま僕は唐揚げを箸で差し、言った。

「……食べる？」これが僕とクレアの初めての交流となった。



それから、僕とクレアの付き合いが始まるようになった。付き合いと言っても恋人関係とかそういう訳ではない。どちらかと言えば、損得勘定？ 僕としても、クレアとしても、多分それが一番都合が良いという解釈に至ったのだと思う。いずれにせよ、それが行われるのはいつも屋上でのことだった。それ以外の場所では関わることはしない。必要がないと思っていたし、それはクレアも思っていたことなのだろう。僕は流れからそのままクレアと呼ぶようになり、クレアは僕のことをカズフミと呼ぶようになった。

「クレアは魔法少女なのかい？」

「正確に言えば、魔法使いなのだけれど」

クレアはそう言って、色々と言明を始めた。クレアの説明はとても長いので、掻い摘まんで理解しないといけない訳だが。

「先ず、魔法使いについて簡単に説明する必要があるの。……魔法使いについて、前回は説明は理解してくれてる？」

「完璧ではないけれど、ある程度なら。出来ることなら、もう一回してくれると嬉しい」

「……そう。じゃあ、するけれど。良く言われる『魔法少女』という存在は、魔法使いの少女、という意味なの。だから、魔法使いが第一にあって、その中にある小さい種類カテゴリが魔法使い、って訳。そこまでは分かっている？」

僕は頷く。

クレアはそれを見て、さらに話を続けた。

「魔法使いは全国に散らばってる訳ではないの。確かに、政府と協力するために東京に居る魔法使いも居るし、各都道府県に数人は魔法使いは居る。決して珍しい人種ではないのかもしれない。けれど、その大半は、魔法都市に住んでいる。ええと、カズフミの知っている知識で言うならば……奈良県って言うのかしら？ そのこの山中にあるのよね。山中にあるから行くのも一苦労だけれど、魔法使いにとってはそれも一種の『修行』としてる訳」

「……ああ、まあ要するにお坊さんとかその類いだろ」

「違うけれど、まあ、それで理解してるならそれで受け取っておくの」

「でも、魔法使いは基本的に魔法都市から出て行くことはないんだろ？ だったらどうしてクレアはわざわざ県境を越えてここまでやって来たんだい。どうやって来たのかは知らないけれどさ」

「……それについては、私の魔法について説明しておく必要があるのだけれど」

魔法。

僕も社会の授業である程度学んでいるから知っているつもりではある。確か、今の科学ではとても辿り着くことの出来ない事象を操作することの出来る学問、だった気がする。

実際問題、どういうメカニズムでそれが行われているのかさっぱり分からなくて、わざわざ文部科学省に魔法庁という行政機関が設立されて、魔法について学び出す始末である。しかしながら、魔法を幾ら学んだところで、僕達現代人が魔法を使うことは殆ど出来ないと言われている。

ただ、一部の存在を除いて――。

「私の魔法は、一言で言えば『時間操作』系になるの。……カズフミは、この前の事故に遭遇したのよね？」

「遭遇というよりかは、体験と言った方が良さそうなの……。いや、違うか」

「時間操作と一言で言っても、様々な種類があるの。例えば、時間逆行、時間進行、時間停止……。その中で私の使える魔法は『時間遅延』スローモーションなの」

「時間遅延？」

「要するに、時間の流れをゆっくりにする、ということ」

「それって……ああ、成る程。だから、あの時、周りに居た僕達は時間の流れをゆっくりに感じたのか。でも、それって時間停止よりも使い勝手が悪いように見えるが」

「そう。時間遅延って、使い勝手が良いように見えて、そう見えないものなの。例えば、これ」

クレアはポケットから砂時計を取り出す。そういえばこの砂時計、この前の事故の時にも使っていたような気がする。

「この砂時計が、何か？」

「この砂時計をひっくり返すと時間が計測出来るようになってるの。そして、その時間は約五分。その時間までしか、私は時間を遅延させることが出来ないの。その後は、五分後の世界が一気に押し寄せてくる。要するに、ツケを支払ってるようなものなの」

「猶予期間、^{モラトリアム}って訳か」

「そういうことなの」

つまり一度使ってしまったらその間完全に停止してしまうことになるだろう、時間停止の魔法と比べると、使い勝手があまり良くないということだ。時間がスローモーションのように動いていく、ということは、例えば自分に起こるであろう出来事を避けるためには、たとえ時間遅延の魔法を使っても、その出来事を何とかしない限り難しいということだ。

——あれ、でもこれって、時間停止しても同じなのでは。

牛乳パックの中身はもう空になってるようだったのか、クレアは中の空気を吸って、完全にぺしゃんこにしてしまう。それは別に普通の行動だった訳なのだけれど、少なくともクレアがやっている、それは奇妙な価値観に囚われたような錯覚に陥ってしまう。

「……でもさ、そんな魔法少女が」

「魔法使い！」

「……ああ、悪かった。悪かったよ。で、そんな魔法使いがどうしてこんな場所に？」

「こんな場所ってどういうこと？」

「外聞を広げるためなら、名古屋じゃなくて大阪か、もっと広がって東京まで行くんじゃないか、って話だよ。確かに、名古屋は日本三大都市の一つに数えられている。ただまあ、それには諸説あると言えればそれまでだけれど。しかしながら、その三大都市の中でも、名古屋は手落ち感があるのは否めない。東京や大阪と比べれば、人口も経済も全く適わない訳だしな。で、だ。どうしてクレアは奈良県の山奥からこんな場所にやって来たのか、って聞きたい訳だよ」

「……捜し物があって」

クレアの言葉に僕は首を傾げる。魔法都市で過ごしていることが多い魔法使いが、言っ
てしまえば外部の都市に『捜し物』？ 正直、その捜し物は僕達科学文明の人間にも分
かるような代物なのだろうか。それについては、今あまり語るべきテーマでもないの
かもしれないけれど。

「その、捜し物は、わざわざここまで来ないと見つからないのかい？」

「ここにやって来た、という情報は得ているのだけれど」

やって来た、ということとは動物なのか。それだけは明らかだった。だって意識を持たない物体なのであれば、自らの力でやって来ることは出来ないのだから。

「それっていったい、誰なんだい？」

「……それは、ここでは言えない」

クレアは立ち上がり、空を見る。

キンコンカンコン、と予鈴が聞こえてくる。予鈴が鳴ったということは後五分で昼休みが終わり、午後の授業が始まるということだ。僕はとっくにご飯を食べ終わっていたから、別に問題は無いのだけれど。

「ねえ、カズフミ」

「ん？」

「今日——私と一緒に帰らない？」

その言葉は、何処かミステリアスな雰囲気漂わせていた。



ここだけの話、女性の家に上がるというのは初めてのことだった。幼稚園や小学校に通っていた頃も、親曰く、何処か大人びた様子の子供で群れを成すことがなかったと言っていた。所謂、一匹狼という奴だった訳だ。でも裏を返せば、そういう明るい話題に何一つかすりもしていなかった、と言えどそこまでの話である。しかしながら、どう言葉を並べ尽くしたところで、僕が女性の家に上がったことがない事実は覆ることはない。いや、覆したところで何が変わるというのだろうか。何も変わらないと思う。普通、こういう時、一般の男子中学生なら興奮の一つでもするのだろうか？ 僕は普通の男子中学生とは違うから、それよりも興味の方が勝っていたのだが。

「さっきからどうしたの、何か考え事でもして。もしかして予定でも入ってた？」

「いや、そんなことはないよ。こんなことを大々的に言えるのは、寧ろ恥ずかしいことなのかもしれないけれど、僕のスケジュールは真っ白だからね」

まあ、つまり予定は零という訳だ。——何の話をしていたんだっけ？ ああ、そうだ。そうだった。

僕は興奮というよりかは興味の方が幾分勝っていた。

どうしてかと言えば、それがただの女子中学生ではなく、魔法使いだったということだ
と思う。

魔法使いって普通に聞いていると、やっぱり何処か世俗とは離れたような類いなのかなんて思ったりする訳だけれど、しかしながら、僕自身の価値観としては教科書に載っているような人種、という答えに至ってしまう訳だ。例えるなら、今僕は間宮林蔵と一緒に歩いているような、そんな感じかな。間宮海峡の名前の由来にもなった歴史上の人物と一緒に歩いているような、そんな不思議な感覚に陥ってしまう、という訳だ。それが何処まで正しいのか、正直僕にもさっぱり分からない訳だけれど。

僕とクレアは交通量の多い道路の歩道を歩いていた。名古屋市は車社会だから所々に車線が多い道が多く見受けられる。百メートル道路と言われる久屋大通が良い例だろう。初めて見た時は、この道路一杯に車で埋まることはあるのだろうか？なんて思っていたけれど、それは案外ラッシュ時に目撃されることになる。そこを通るバスに乗った時は、もうご愁傷様と言うほかない。

そして、その道路を車はスピードを上げてどんどん通過していく。皆、何処へ向かうというのだろうか？ 遠くへ行くというのなら、適当な入口から名古屋高速に乗れば良いし、昨今のエコブームを鑑みれば鉄道でも乗れば良いのだろうけれど、地下鉄が名古屋市全部に通っているかと言えばそうではなく、例えば北東部の守山区の大半や西部の港区の大半などはそれに該当しない。

では、そのエリアでは交通はどうしているのか？

前者ではゆとりーとラインという鉄道なのかバスなのか良く分からないけれど取り敢えずバスだろうな、みたいな交通手段が設けられているし、後者に対しては他のエリアに比べて——正確に言えば、名駅や栄といった名古屋市の中心部に近いぐらいの——バスの路線網が広がっているのです、そこに関しては気にする必要はないだろう。まあ、なくても自家用車で何とかしている訳だけれど。

「それにしても、この街って車が本当に多いよね」

「クレアの住んでいた……その、」

「別に口ごもる必要はないよ。別に、昔みたいに魔女裁判が行われたり魔女狩りが行われたりする訳でもないし。寧ろ今は科学文明と魔法文明は共存しよう、なんて言ってるどころなんだから。それについては、気にする必要はないと思うの」

「……そうか。だったら言わせてもらおうけれど、君の住んでいた、魔法都市じゃ車は走っていないかったのか？」

「うん。あ、でも走ってなかった訳じゃないよ。ただ、科学技術がこの街みたいな場所に比べると、二段階ぐらい遅れてるような感じなんだ。高度経済成長期、って言うのかな？」

クレアの話は続く。

「それぐらいの技術レベルは到達してると思っただけで良いと思うよ。一応、この国の政府と協力関係にあるとは言っても、人々が皆科学技術に汚染されちゃったら、それこそ魔法がなくなっちゃうなんてことになるんだもの」

汚染、ってそりゃ大げさな——なんて思ったけれど、世界各地で起きている先住民族の文化を新しくやって来た人間によって潰している事例は、この国を含めて多数確認されているので、はつきり言ってそれを否定することは出来なかった。僕がそんな偉い人間という訳でもないけれど、僕の知っている限りだと、その価値観は要確認といったところだったのかもしれない。

「あ、別に今の人間が悪いとは思ってないよ。だって科学は必要だと思ったから、存在してる訳だし。それが存在してなかったら、今の人間はここまで繁栄しなかったかもしれないでしょう？ だったら、別に悪いことじゃないかな、って思うんだ。あ、でも、魔法が使えなく鳴っちゃうのは嫌かな」

「やっぱりそこはそう思うんだな……」

でもまあ、それは当然かもしれない。だって、今まで魔法を使っていたのに、魔法が使えなくなる——なんて事態が起こるかどうかは分からないけれど、もし起こったとしたら、全世界の魔法使いが暴動を起こすかもしれない。

僕は魔法のことを、教科書で学んだ以上のことは知らないけれど、しかしながら、昔はそれが近代兵器に勝るとも劣らないぐらいの実力を持っていたことは知っている。ということは、実力のある魔法使いは、一つの近代兵器を一つ所有しているに等しい、ということだ。かつては魔法使いを取り合って裏で様々な取引が行われていた、なんて噂も聞いたことがある。そう考えると、成る程、そうなるのも致し方ないのかな、と思う訳だ。まあ、平和ボケしている人間の考え、と言われればそれまでなのだけれど。

「ここが、私の家」

ある場所で立ち止まったクレアは、目の前にあった建物を指差した。そこは喫茶店だった。名前は聞いたことないけれど、その建物の佇まいからして、長くこの場所で続けてきたのかもしれない。

それにしても、この家はいったい誰の家なのだろうか？

「なあ、クレア。ここには君の家族が住んでいるのかい？」

「いや、ここには居候させてもらっているの。正確に言えば、『居候制度』というものを使ってるのだけれど」

「居候制度？」

「詳しくは、中に入って話すの。さ、入って」

扉を開けて、僕を先に中に入れようとするクレア。一応僕が客人だからそのような態度を取るのだろうか。そう考えると、少しこそばゆさも覚えるけれど、ここで物怖じしていても仕方がない。僕は取り敢えず喫茶店の中に入ることにするのだった。

喫茶店の中は、誰も居なかった。カウンターと、テーブル席が幾つかある、至って普通の喫茶店だった。カウンターの中では一人の女性が、この喫茶店には似つかわしくないような割烹着を着て、皿洗いをしていたのだが、僕が入ってきたのを音で確認して、こちらを見ていた。ちょうど、目が合ってしまった。いや、見ず知らずの人と目が合うのは非常に気まずいな。まあ、でも、恐らくはクレアの関係者なんだろうけれど。

「いらっしやい。……あら、ボウヤ、お一人？」

艶っぽい口紅をした唇から発せられた声は、何処か妖艶な雰囲気漂わせる。行ったこととはないけれど、夜のお店でそのまま働いていそうな、そんな感じだった。行ったことはないけれど。

「ただいま、最上さん。ちょっと一緒に帰ることになって。アイスココア二つお願いしたいの」

僕の背後からひよこっと顔だけ出してくるクレア。

それを見て最上さんと呼ばれた女性は笑みを浮かべると、

「はいはい、分かりました。手はきちんと洗うんですよ」

「ありがとうなの！」

そう言って店の奥へと走って行くクレア。このままだと何処に行ったら良いのか分からなくなってしまうので僕も追いかけることにした。見ず知らずの人が住む見ず知らずの家は、あまり居心地が良いものではないからな。そう思って店の奥へと続く引き戸——その引き戸はクレアが開けたままとなっていた。僕が入るのを見越したのか、閉めるのを忘れていったのかは分からない——を閉めようとして、また最上さんと目が合った。最上さんは何も言わずにただにっこり笑みを浮かべていた。その笑顔に僕は少しだけ恐怖を覚えてしまい、逃げるように引き戸を閉じてしまうのだった。それが悪い行為であることは、重々承知していたのだけれど。

クレアの部屋は二階にあった。というか、二階が住居スペースになっていて、一階まるまる店舗になっているような、良くあるタイプの住居兼店舗だった訳である。それについては語る必要はないだろうし、語るに落ちると言ったところだろうか。いずれにせよ、それについて長々と供述したところで何の意味もないのだから。

「さあ、入って良いの」

「……そう、言われてもな」

クレアの部屋は、ピンクのラグの上にちゃぶ台みたいなテーブルが置かれていて、壁際にベッド、窓側の壁に本棚と勉強机があるぐらいの普通の部屋だった。良く見ると自分用のテレビまで用意されている。そう考えると普通の部屋を超えない、普通オブ普通なんじゃないかなんて思ってしまう。いや、何だよ、普通オブ普通って。

僕は適当に床の上に鞆を置いて、そのまま座ることにした。クレアは勉強机の傍に鞆を置いて、椅子に腰掛けた。

机の上には、分厚いハードカバーの本が出しっぱなしになっている。それについて、下の階に居たあの人——確か最上さんとか言っていたっけか——は何も言わないのだろうか。

少々疑問は残るが、とにかく問題は一つある。——話をいつ切り出せば良いのか、ということだ。クレアの言っていた捜し物、それについて聞いても良いのだろうか、といてか、それを聞くためにわざわざいつもの通学ルートを外れてやって来た訳なのだけれど——僕としては、やはりプライベートにずけずけと土足で踏み荒らすのはどうか、なんて思う訳だ。それぐらいの常識ぐらい持ち合わせているとも。

「……まず、居候制度について説明するの」

ああ、まずそれからか。僕はそう思って、頷く。

「簡単に言えば、魔法都市外に、未成年の魔法使いが暮らしていくためには、二つの方法しかないの。一つは、一人暮らしをすること。そしてもう一つは、居候制度を活用すること。でも、前者については、十八歳にならないと使えないの。こっちの世界のルールに則って行動しないとイケないから、もしそれを破ってしまうと、こっちの世界の法律で罰せられてしまうの。特別な階級だ、なんてたまたま聞いたことはあるでしょう？　魔法使いは、政府にも協力しているから、それなりの立場だって。でも、そんなことはないの。外に出れば、一般人と同じ扱い」

「……そんなものなのかい」

ニヒルな笑みを浮かべながら、僕は話を聞く。

「そして、居候制度を活用するためには条件が必要な。それは、元老院に許可を貰わなくてはならないということ。私も……いや、正確に言えば、どの魔法使いだって、居候制度を活用してる以上は、誰だって元老院に許可を求めないといけないの。元老院というのは、こっちの世界で言うところの、政府みたいな扱いなの」

「つまり、国が許可を出さないと、外に出してくれないってことか。まあ、良く出来てると言えば出来ている制度だよな。だって、技術の流出をなるべく防ごうと思っている訳だろうし」

「……そして、私がそんなことをしてまでここにやって来た理由、それは——」
クレアは、一拍置いて、そして結論を述べた。

「——行方不明になった、私のお父さんを見つげるためなの」



クレアのお父さん——黒津空我は、魔法都市でも一二を誇る研究者だったらしい。自らも魔法の技術を理解しており、それをいかにして魔法使いの人間にも魔法を使えるようにならないか、ということをはたすら研究していたらしい。

そして、数年前にその分野でこちらの世界の学会で発表する予定があったらしいのだが——。

「でも、それをするために魔法都市を出たのが最後、だったということか……」

「そうなの」

「でも、おかしくないか？ 関所みたいな……そういう場所には映り込んでいなかったのか？ それに、ここは科学技術の水準が高い国家だけ？ 監視カメラや、そうじゃなくても人目についていることだってあるだろうよ」

「でも、見つからなかったの。見つかることはなかったの。どうしてなのかは分からない。分からないけれど、消息を絶ったの」

「……名古屋にやって来た理由は？」

「この辺りでお父さんが見つかった、という証言があったの。だから、お父さんの手がかりを少しでも探すために……」

そうだったのか、と言いなながら、先程やって来たアイスココアを一口飲む。甘すぎず、苦すぎず、上に小さく生クリームがのっかっているのがポイントだろうか。

「でも、この街は広いぞ。そう簡単に見つかるとは思わないが——」

「見つかるの、絶対に」

これ以上、周りがとやかく言う必要もないのかもしれない。それは、どちらかと言えば、彼女の気分を害するだけに過ぎないのだから。少なくとも、僕はそう思うことしか出来なかった。

それから僕達は、色々話をしたのだけれど——その中で得られた結論としては、先程話が上がった以上の話は何一つとして存在しなかった、ということだろう。要するに、彼女も未だ居場所を突き止めている最中なのだ。それについては水を差すことはしない方が良いでしょう。そう思った次第だ。

日が暮れてきたので時間を見ると——もう五時を回っていた。別に門限がある訳ではないけれど、取り敢えず急いで帰るに越したことはない。そう思って、僕は立ち上がる。

「もう帰るの？」

「うん。だって、もう夕方だからね。今から帰るとなると、バスの方が早いかな……。クレアの家の近くにバス停があっただろう？　そこから僕の家までは一本なんだ。だから、運賃さえ用意してあれば問題なし。と言っても僕の場合はICカードになる訳だけれどね。そっちの方がポイントも貯まるし」

「送るの」

「良いよ、別に。一人で帰ることが出来ないなんて訳でもあるまいし」

「違うの。——もし、同業者が居たら大変だから」

「同業者？　それってつまり、魔法使いのこと？」

「一度魔法使いと関わった人間には、『魔法使いの匂い』が染みついてしまうの。そして、魔法使いはそれを察知出来る能力を持つてるの。ここのような、魔法使いが住処としている場所は、秘匿の護符を使って守っているから問題ないけれど……。でも、カズフミのような一般人はそうはいかない。もし、魔法使いに知られたら、そこから魔法使いに繋がるかもしれない、と思って他の魔法使いがやって来るかもしれない」

何だよ、それ。だったらどうしてクレアは僕と交流を持つことにしたのだろうか。

「それについては……ごめんなさい、と言うしかないの。でも、最初に私の領域フィールドに踏み込んできたのは、カズフミなの。それだけは理解して欲しいの。あなたがやって来なければ、何も始まらなかった。けれど、あなたは何も知らずに足を踏み入れてしまった。だから、私はあなたを全力で守る、そう決めたの」

「それは有難いんだけどさ……。どうして、僕なんかを守ることに決めたんだけ？ 別に、突き放す手だってあった訳だろう？」

「確かにそうする手もあったのだけれど——でも、あなたは何か違うような気がして」
「うん？ それっていったいどういうこと？」

「何だろう……。分からないの。けれど、あなたから足を踏み込んだ以上、あなたにも協力してもらいたい。生憎、私はこの街のことは何も知らない訳だし」

それを聞いて、僕は深々と溜息を吐く。

「まあ、別に嫌という訳じゃないけれど……」

「それなら、これを渡しておくの」

そう言ってクレアは何かを渡してきた。それは木で出来たホイッスルのようなものだった。何だろう、防犯ブザーなら既に持っているしな——。

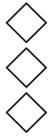
「それは、『ウイツチ・ホイツスル魔女の笛』と呼ばれてるものなの。まあ、今は魔法使い全体で使ってるから、名前のちぐはぐ加減はあるけれど、それについては気にしたら負けなの。その音色は、家系によって微妙に異なってる、その音色を魔法使いは覚えておく必要があるの。その音色が鳴った時、魔法使いは速やかにその場に向かわなくてはならないの」

何だ、やっぱり防犯ブザーじゃないか。

「どうしてこれを僕に？」

「さっきも言った通り、カズフミにはもう『魔法使いの匂い』が付いてる可能性が非常に高いの。それを考えると、他の魔法使いに狙われる可能性が高いの。でも、カズフミは、魔法を使うことが出来ない。そうすると、魔法使いに対抗する手段がない。じゃあ、どうしたら良いか……という訳で、私はそれを渡すことにしたの。本当はあんまり渡さない方が良いらしいのだけれど……、でも、カズフミが殺されるのは嫌なの」

「僕だって、身勝手に殺されたくないよ。……でも、まあ、有難う。これは大事に受け取っておくよ」そう言って、僕はポケットにそれを仕舞い込んだ。



帰りはバスに乗ることになった。名古屋市の重要な交通手段の一つとして数えられているバスは、主に名古屋市営バス、通称市バスと三重交通、そして名鉄バスの三社によって運営されている。昔はもう少しあつたらしいけれど、それについて詳しいことは知らない。生まれる前のことを詳しく知っているのは、それはそれでちよつと気味が悪いだろう？

市バスは文字通り市内を縦横無尽に走っている訳だけれど、当然全てが黒字路線な訳がなく、僕が乗るこの路線のように赤字路線もある訳だ。赤字路線にもなると、乗客が敬老バスを使っているか、一日乗車券でバスを乗りまくる変わり者しか居ない。いや、バスに乗りまくる人間を変わり者というのもどうかと思うけれど。

バス停はクレアの家から少し離れたところにあつた。時刻表を見ると、後十五分でバスが来るらしい。だったらそのままバスを待つことにしようか、と思い僕はスマートフォンを取り出す。そして鞆に入っているイヤホンも序でに取り出す。イヤホンは無線で接続出来るものなので、今の主流となったような、イヤホンジャックと充電ケーブルの差し口が一緒になってしまったようなタイプでも使うことが出来る。でも、そのような状態でも無線のイヤホンを忌避している人も居るようで、そういう人のためにイヤホンジャックと充電ケーブルを変換するケーブルも用意されている。標準でイヤホンジャックを搭載しておけば良いのに、とは思うが。

再生ボタンをタップして、音楽が流れ始める。僕が小学生の頃から続けられている、バンドの曲だ。早い展開の曲が多いことで知られており、カラオケで歌うのは大変らしい。まあ、確かに分からなくはないけれど。それにしても、これを歌えるボーカルって凄いよな。それを作った張本人だから歌えないことはないのかもかもしれないけれど。

「匂うねえ」

イヤホンをしていたはずなのに、声が突き刺さるように耳に届いてきた。その声は沼の底から引きずり込むような、そんな声だった。出来ることなら、そう何度も聞きたくないような、そんな声――。

「匂う。匂う。匂う。いったいどうしてこんな匂うのかねえ。ただの一般人から、こんなにも『魔法使い』の匂いがするのかねえ」

ぞわり、と背中を舐められたような感覚が襲いかかる。

背後から聞こえてくるその声の主を確認しないといけないと思って、僕は振り返ろうとした。でも、直ぐには動けなかった。身体が拒否反応を示しているのだと、思う。今振り返っちゃいけない。振り返ることは出来ない、と言っているのかもしれない。けれど、そうであったとしても、僕は振り返らなくてはならなかった。この嫌悪感の正体を、突き止めなくてはならなかったのだ。

「……へえ、精神はどうやらただの一般人じゃないようなのだよ」

白いスーツを着た男だった。鳥の頭のようなマスクを被っており、顔を確認することは出来ない。手も手袋をしている様子だった。それにしても、幻獣過ぎやしないか、その装備。――ただ、僕が目の前でそれを見た感想としては、この場所にはあまりにも異質な存在だということだった。このような人間が普段から歩いていたら、即不審者として地域のデータベースに登録されていたことだろう。ただ、今の僕ならば、それは何者であるか、理解出来ると思う。何故なら、そいつはこう言ったから――。

「……今、『魔法使いの匂い』って言ったか？」

僕はポケットに手をつ突っ込み、あの笛をいつでも出せるように準備していた。僕の子想が正しければ、目の前に居る人間は九十九パーセント、魔法使いだ。そして、僕に敵意を抱いているのも明らかだった。

「ああ、言ったとも。魔法使いの匂いがする、ってね。魔法使いに触れた者か、魔法使い本人からしか匂うことのない、その匂いをどうしてただの学生が持っているのかねえ？」
首を傾げながら、一步、近づく。それと同時に僕は一步退き、距離を保つ。

「……それは、魔法使いの出所を言え、ということなのだろうけれど」

「ああ、教えて欲しいねえ。教えてくれるなら、逃がしてやっても良いよ」

「でも、それはお断りだ」

「ああ、そうだろうねえ。もし教えてくれるなら、とつくに逃げようとしてたはずさ。まあ、既にここは人払いを済ませてるから逃げることなど出来やしないのだけれど」

確かに、そう言われてみると、人気あまりにもなさ過ぎた。車が一本も通っていないし、人もまったく歩いていない。

これが——魔法使いの人払いだというのか？

「強がったところで、君には魔法が使えらるとは到底思えないのだけれどねえ。諦めて白旗を揚げて、魔法使いの居場所を教えなくても良いんじゃないかなあ？」

「だから言っただろ。——それはお断りだって」

僕はポケットにあった笛を取り出し、急ぎ吹く。耳をつんざくような高い音が空間にこだました。それを見て、目の前に立っているスーツの男は空気が抜けたような声を出して、「へえ、『魔女の笛』を持たせてもらってたのか。……どうやら、君と接触した魔法使いはよっぽど君のことを信頼してるみたいだねえ。だって、それが敵の手に渡ったら、このことそこにやって来ることになってしまいう訳なんだから」

男はポケットにあった何かを取り出した。それは丸薬のようだった。それを転がしながら、話を続ける。

「まあ、いずれにせよ、その魔法使いがやって来るまでには時間がかかるだろうから。君を排除するのも簡単な訳だけれど。取り敢えず、まずは邪魔な君を排除することにしようか」

そして、丸薬をこちらに向けて飛ばしてきた。

僕は、不安で、動けなかった。

本当にクレアはやって来てくれるのか？

僕を助けに来てくれるのか？

デコイという可能性はないだろうか？

そんな不安が一気に押し寄せてきて——そしてその反動で、僕はまったく行動一つ示すことが出来なかった。逃げないと、逃げないと、逃げないと——いけないのに！

しかし、その直ぐに僕の周りの時間が、ぼんやりとしていた。正確に言えば、周りの時間はそのまま動いているような気がするのに、僕の周り——正確には半径数メートル程度——の時間だけゆっくりと流れているような、そんな錯覚に陥ったのだ。いや、これは錯覚じゃない。何故なら、僕は一度この間隔を経験したことがある。そう、あれは——。

「お待たせしたの、カズフミ」

僕の横に立っていたのは、紛れもなく、クレアだった。

クレアはいったいどうやって僕の鳴らした笛の音を聞き取ったのだろうか。魔法使いにはそういう訓練が必要だったりするのだろうか。それとも、特殊な音が発せられていて、遠くに居ても聞き取ることが出来るとか、そういう類いの話だったりするのだろうか。そんなことを考えていた訳だけれど、クレアに身体を引っ張られて、僕は我に返る。そうだ、今はそんなことをしている場合じゃない。今は、あの白いスーツの男から射出された丸薬を避けなくてはならないのだ。そのまま喰らって何が起きるか分かったものじゃない。即効性の毒だったら、その場で死んでしまうことだって十二分に有り得るからだ。だったら、急いで逃げなくてはならない。僕とクレアは歩幅を合わせて、少しずれた場所に移動——ただし白いスーツの男からは視線を外すことのないような場所に移動——して、クレアは指を弾く。同時に時間の流れが急激にスピードを上げ、元々僕達が居た時間軸に合流する。爆発音が起きる。それを聞いて、僕とクレアはそちらを見た。すると、僕達が今まで立っていた場所で爆発が起きていた。成る程、あれは爆発を引き起こす何らかの類いだったのか。もしかしたら、火薬を充填していたのかもしれないし、或いは、小型の爆弾だったのかもしれない。魔法の類いではない可能性だって充分に有り得る。そう思って、次は白いスーツの男に視線を移す。白いスーツの男は僕達が別の場所に移動しているのを確認して、目を疑っている様子だった。

どうやら一撃で斃せると思っていたようだが、そう簡単にいくはずがない。それだけで終わってしまったのなら、まさに一卷の終わりと言った所だろう。

「馬鹿な……馬鹿な！ どうして、あの爆発を抜け出してるんだ！ あの爆発から逃れることは出来ないはずなのに！」

「ふうん、あの爆発は、あなたが起こしたものだっただけ」

いや、見れば分かる話だろうよ、クレア。と思ったけれど、突っ込むのは野暮だろうし、取り敢えず状況を確認しておくことにした。爆発があった場所は、地面が黒ずんでいる。かなりのエネルギーを使ったようにも思えた。しかし——不審に思ったのは、その場所が不自然に濡れていることだった。あれ？ 雨とか降っていたっけ？

そんな考察を続けていたら、ちゃきん、という音が聞こえてきた。いったい何があったのかと視線を元に戻すと——クレアがナイフを片手に白いスーツの男を睨み付けていた。ナイフ、と一概に言ってもただのナイフではない。所謂サバイバルナイフの類いだと思う。柄の部分には、アクセントとしてなのか、或いは魔法的な考えなのかは分からないけれど、九個の宝石が散りばめられていた。そして、僕は直ぐにどうしてクレアがナイフを持っているのか、ということについて、僕なりの回答を得ることになった。クレアは『時』を操ることが出来る。

正確に言えば、スローモーションにすることが出来る訳だが、それを攻撃に使うことは非常に難しい。使うとするならば、やはり自分に降りかかる火の粉を避けるために時間をゆっくりにして、そこから優雅に移動する、ぐらいしか想像が付かない。

では、自らの身を守るにはどうしたら良いだろうか？

答えは簡単だ。

それに対する武器を持ち合わせれば良い。そして、それを怪しまれないようにするためには、やはり武器をコンパクトにすることが一番だという訳だ。

「はっ。そのナイフ一つで僕を殺そうとするのかい。そんなことが出来るとでも思っているのかい？」

「出来るの。そうじゃなかったら、私はナイフを使わないの」

「ふん。減らず口を叩きやがって。それでも、魔法使いなのか。いったいどういう魔法を使ったのか分からないけれど……少なくともナイフを使うと言うことは、君の魔法は攻撃に適さない魔法であることは分かる」

再び、ポケットから丸薬を取り出す。

「気をつける、クレア。あいつ、あの丸薬を飛ばしてくるだけで爆発を引き寄せた。いったいどんなメカニズムなのか分からないけれど……」

「そう。そう、そう、そう、そう、そう、そう、そう！ 僕の魔法の種が簡単に分かってたまるものか。分かってなるものか！ 僕は、唯一無二にして縦横無尽に魔法使いとして君臨するのだから！ 僕の、その魔法を、理解してもらっては困るんだよ」

そして、白いスーツの男は丸薬を飛ばす。クレアは再び魔法を行使して時間の流れを緩める。

僕達は安全圏に移動し、クレアが魔法を解除し——爆発が起きる。爆発地を見ると、やはり地面が濡れていた。雨が降っていた訳ではない。さっきの場所だけなら、元々何らかの原因で濡れていたと推測出来るが、先程僕達が居た場所は、特に地面が濡れているようなことはなかった。——ということは、この現象に、あの魔法を紐解く鍵があるのだと、推測出来る。

「クレア」

「何？」

「少し、時間を稼いでくれないか。僕は考えておくよ、この魔法使いを突破する道を」
「分かった、でも」

クレアは僕の左手をぎゅっと握った。

「動くことは、止めないから！」

三度、魔法を使う。今度はあの白いスーツの男に向かうために。攻撃をするために。直前まで近づいて、そこで魔法を解除する。白いスーツの男からしてみれば、いきなり僕とクレアが目の前に現れたのだから、慌ててしまうのは当然のことだろう。しかし、相手も魔法使いの一人であることには間違いないようで、いつの間にか手に忍ばせていた丸薬を僕達に叩き付けた。危ない！ と思い目を瞑ってしまったが、しかし、それはただの目眩まし。煙玉だった。黒い煙がもくもくもくと生み出され——やがて僕達の視界を埋め尽くす。それによって、ほんの僅かであったとしても、僕達から『時間』を奪い取った。

「クレア！」

「分かってるの！」

僕の言葉に、クレアは答える。四度目の、魔法だ。煙に包まれた視界から急いで外に出ると——ちようど僕達がそこで出てくるのを待ち構えていたのか、ゆっくりと白いスーツの男が動いていた。

しかし、この時間軸には僕達しか居ない。

僕達しか干渉できない。

だから、だから、だから——この時間軸では、クレアは無敵だ。敵なんて居る訳がない。それこそ、この時間軸に干渉出来る存在が居ない限り。

パチン！ と指を弾く音が聞こえて、僕達の時間軸は、元々の時間軸に合流した。最初はその不思議な感覚——どちらかと言えば眩暈に近いだろうか——にも慣れてきた。こんな状態に慣れてしまう人間なんて、きっと僕ぐらいのものだろうけれど。

「何故だ、何故だ！ 何故だ、何故だ、何故だ、何故だ、何故だ、何故だ——」

白いスーツの男は、ただただ言葉を連ねていた。クレアが使っている魔法の正体が掴めないらしい。——でも、魔法使いなら、相手の使っている魔法ぐらい分かって常識じゃないのか？

「でも——これで分かった」

僕の言葉を聞いて、クレアはゆっくりと頷いた。

それを合図と言わんばかりのタイミングで、五度目の魔法を放つ。今度は距離を一気に縮めて、白いスーツの男を追い詰める。クレアは何処からか取り出したワイヤーをそのまま白いスーツの男に巻き付けて身動きが取れないようにして、そして——勝利宣言の如く、左手を上げて指を弾いた。

「な……な！ いったい何が起きたというんだ！ 僕は、僕は、僕は——！ 魔法を使っ
て、お前達を追い詰めていたはずなのに！ 逆に、僕の方がこのようなことになってしま
うなんて」

身体を振って何とかワイヤーをはずそうとしているが、無駄だった。そんな簡単に外れるようにワイヤーで括っているとは思えなかったからだ。クレアが一步前に出て、言う。「そのワイヤーは、このナイフと同じように、魔法使いの動きを止めるように出来てるの。どういうメカニズムかは言わない方が良いと思うから言わないでおくのだけれど……、でも、少なくともあなたの動きを止めることは出来るの」

「ば、馬鹿な……。魔法使いの動きを止める効果のあるアイテムだって……。？ そんなもの、いったい何処で開発されたと——」

クレアは容赦なく、白いスーツの男の右手にナイフを突き刺した。

「うがあっ……！」

白いスーツの男は声にもならない、悲痛の叫びを上げる。

普通の人間でも掌にナイフを突き刺されれば、下手したらその場で気絶しかねない。それを考えると、随分と強い精神を持っていると言えるのかもしれない。

はつきり言うのと、見ているだけで痛さが伝わってくるのだが。

「先ず——」

「待った、クレア。先ずは僕の番だ」一息吐いて、話を続ける。「この男の魔法について解説しよう」

このまま放置しているとクレアが人を殺しかねないので、取り敢えず早々に僕の出番を片付けてしまおう、という魂胆だ。そうでもしないと話がまとまらないかもしれないからな。

「結論から言うと、この男の魔法は、科学で言うところの『化学反応』の一種だ」

「化学反応？」

「具体的に言えば、水素と酸素を使った化学反応と言えば良いかな。水素の原子記号は分かる？」

「……いや、分からない」

マジか。——まあ、でも魔法使いだしな。科学技術のことを詳しく知らなくても良いのかもしれない。くそっ、少しだけ魔法使いが羨ましく見えてきた。

「水素の原子記号はHだ。そして、酸素の原子記号はO。それぞれ、分子が二つくっついた状態で安定しているから、H₂とO₂になる訳だけれど、それについては詳しく語る必要はないと思う。問題は、これがどのような化学反応を示したか、だ。水素に火を近づけると、爆発が起きる。これを、つまり、燃料にして使っているのが良く知られているんだけれど——」

「つまり、爆発を起こした、ということなの？」

「まあ、掻い摘まんで言えばそういうことになるかな。……正確には、水素と酸素を反応させたことで、水を生み出すんだ。その時のエネルギーを使って、爆発を起こしたって訳。爆発を起こした場所が濡れていたことに、クレアは気づいていたかい？」

「……言われてみたら、そうだった気がするの」

「そうだったんだよ。雨が降っていた訳でもないし、近くに水の入ったバケツがあった訳でもない。にもかかわらず、だ。何故か地面は濡れていた。となると答えは一つ、爆発が起きた時の反応で水が生み出された、ということだ。仮にそれが水じゃなくて——例えば、灯油とかの燃料だったら、そのまま燃えてしまうから、地面も燃えていたはず。しかし、地面は燃えていなかった。ということ、それは不燃性の液体だ、ということ。爆発と同じ時に不燃性の液体——つまり、水を生み出す反応と言ったら、水素と酸素の化学反応の他に有り得ない、という訳だ」

「へえ、成る程、なの」クレアが僕の合計二ページ近くにも及ぶ解説に、たった一言で反応を終わらせてしまったので、少々悲しい感じはあるが、それについては、あまりどうこう言う必要もない。

言う意味がまったくないし。

言ったところでまったくの無駄だからだ。

ある程度の知識を蓄えている人との会話なら未だ良いのかもしれないけれど、知識が零の人と会話をするとなると、その知識についての補足も沢山しなくてはならないので、結局説明する手間が増えてしまう。となると、あまり長々と説明せざるを得なくなってしまうのだが、相手からすれば、あまり聞く必要のない情報を延々と話をしていってしまうこと、少々つまらなくなってしまう、という訳だ。だったら、双方、時間の無駄だから、僕としては必要最低限の会話で済ましてしまおうという考えなのである。それが、お互いのためなのだから。

「じゃあ、次は私の番なの」

クレアはそのまま話を続ける。結局、クレアは何を言いたかったのだろう。

「――先ず、あなたの正体は何？」

「僕の名前を聞きたい、ということかい」

少しだけ落ち着いてきたのか、白いスーツの男は息を整えている。とは言っても、マスクは付いているので表情を窺うことが出来ないのだが。

「良いだろう、ここまで乗り越えた君には名前を教えてあげよう。僕の名前は……水城蓮だ。まあ、名前を知ったところで何の意味もないだろうけれどね」

「……名前からして、あなたの属性は『水』と言ったところなの？」

「ふふん、まあ、そういうことになるね。僕の使える魔法は水だ。どのような魔法を使ってるか、ということについてはあまり言わないでおいた方が良いと思ってるけれど」

「強気なの。そっちが負けたことにも気づいてないの」

「気づいてない訳がないだろう。寧ろ、これは君に手向けた花束のようなものだよ。勝者に与えられし栄光と言えれば良いだろうか」

「……言いたいことはそれだけ？」

「未だあるとも。後一つね。君が誰だかさっぱり分からなかったのだが……恐らく、黒津空我氏の娘ではないかね？」

それを聞いて、クレアの表情が一気に青ざめた。そして、人が変わったかのように、何度も何度も何度も何度も何度も、ナイフを掌に突き刺していく。その度に、水城の身体が小刻みに震える。

「おい、クレア、止めろっ。情報を抜き出したんじゃないじゃなかったのかっ。そのままだと、シヨック死してしまうぞ」

「あ……！　そ、それは不味いの」

クレアは僕の言葉を聞いて、ようやく動きを止めた。危ない、このままだと死人が出るところだった。

僕はそう思いながら、クレアを見る。

クレアは落ち着いているように見えたが、表情は未だ少し気を落としたままだった。余程自分の正体がばれたことが不味かったのだろうか。

「……はは、自分の正体を知られて、かなり困惑してるように見える。自分をどうしたいあ、考えてるのかね？ それとも、行方不明になった父君を探そうと躍起になって、無理矢理一般人を使うようになったのかね？」

弱みを握ったのだと分かったのか、少しだけ高圧的な態度を取る水城。代わりに僕が殴ってやりたくなかったが、何とか抑える。

とにかく今は、僕もクレアも、こいつから情報を得ておきたいのだ。

「あなたは、何か知ってるの？ お父さん……黒津空我が何処に行ってしまったのか、という事について」

「知ってる訳がないだろう。何せ彼は雲隠れのように消えてしまったのだ。僕のような末端の魔法使いが知ってる訳がないだろう？」

「末端？ どういうことなの？ あなたは濃いんで動いてる訳ではないの？」

「違うね。僕達は組織で動いてる。戦いは数だよ、君達はそんなことも知らないのかね。

『イノケンテイウス魔女狩りの教皇』、それが僕達の組織の名前だ」

「……魔女狩りで有名な存在を名前に使うなんて、少々、というかとても気味が悪いの。あなた、いいえ、あなた達は、何が目的で動いてるの？」

「それは僕も知らない。ただ、僕のような末端がやってることと言えば、魔法使いの懐柔だろうね。要するに組織への勧誘さ。そして、組織そのものを大きくしていく。魔法使いとしての人生が長くない君でも、少しはその意味が理解できるのではないかな？」

「——話に一貫性が見受けられないの。あなたは、何も知らないということなの？」

「ああ、知らないよ。知ってたとしても、言う訳がない。当然だろう？」

刹那、水城の身体が赤い炎に包まれた。最初、僕は何処からか攻撃を受けたのではないかと勘繰ってしまったが——。

「カズフミ、違う。これは……最初から処分するための時間稼ぎだったの！」

「ははは……。気づいたところでもう遅いよ」

燃え始めているはずなのに、水城からは未だ声が発せられている。

もしかして、こいつがマスクを被って、顔を隠していた理由って——。

「それにしても、黒津博士の娘がこの名古屋にやって来てたとはね！ 僕も色々面白くなってきたよ。取り敢えず、おさらばといこうじゃないか。ご挨拶、ということとで最初の展開としてはまずまずだったんじゃないかな？ それではさようなら——」

ガシヤン、という音を立ててマスクが剥がれ落ちる。その中に入っていたのは、スピーカーだった。

要するに、この水城蓮を名乗っていた『何者か』は、ただの人形——という訳だった。



帰り道は、結局二人で帰ることになった。僕のことを心配だから仕方がない、というのだ。そう言われたら僕も断ることが出来なかった。バスを使って帰る手も考えていたのだが、また魔法使いに狙われるかもしれない、と言われてしまつて、仕方なく歩いて帰っている次第だ。当分、公共交通機関は一人じゃ使えないかもしれないな。この年になつて。

「カズフミは、怖くなかったの？」

「うん？ 何が？」

「その……魔法使いとの戦いについて」

「ああ、そのことか」

どうしてだろうな——何故か分からないけれど、何故か怖くなかつた。それが当然のことだと思っていた。

仕方がないことだと思っていた。

有り得ないこととは思えなかった。それがいつかやって来る出来事であるだろう、というのを理解していた。どうしてだろう。まったく見当がつかないのだけれど。

『匂い』を落とす方法はあるから、少なくともそれまでは、一人で出歩かない方が良いの」

「そうか。方法はあるのか。……」応確認しておくけれど、風呂とかで洗い流せたりしないんだよな？」

「それで出来たら、苦労しないの」

「そりゃそうだよな」

僕はシニカルに微笑む。

こうして同年代の人と並んで歩くなんて、あまり経験がないのだけれど、しかしいざやってみると、これもこれで悪くないな、って思ってしまった。まあ、そういうことを経験していくというのが人生の良いところなのかも。

「それにしても……あの様子だと、未だ魔法使いは居るみたいだよな。それに、今回の魔法使いは逃げられた訳だし」

「もっと早く気づけば良かったの」

クレアは顔を俯かせる。確かに、彼女がナイフを掌に刺した時に気づかなかったのか——と言われてしまったら、それは彼女の責任になってしまふのかもしれないけれど、しかしながら、それを今非難することが出来るのは、僕でも彼女自身でもない。他の誰でもない。誰にでもある失敗。誰にでもある間違い。それを突き放して、見捨てて、放置することなんて、今の僕には出来やしなかった。出来るはずがなかった。出来る訳がなかった。逆に、この状況で出来る人間が居るとするなら、そいつはとても冷酷な人間なんじゃないか、って思う。

「でも、それが悪いこととは思わないよ」
僕は言った。

何も悪いことだと思わないからだ。それを悪いと思わないからだ。誰かが言っていた気がする——罪を犯していない者だけが、この人間に石を投げなさい——と。昔の記憶だから曖昧なことなのかもしれないけれど。

僕としては、その言葉という諺というか古語というか言い回しというか、そういう表現が好きなのだ。嫌いな訳があるか。面倒な表現をひたすらこねくり回しているのが面白いんだろうが。

「悪いとは思わない、って？」

「悪いと思っているのは、誰しもそれを悪いと思っているからさ。そして、その悪いと思っ
ていることについても、昔してしまったことがあると自覚しているからさ。それが正し
いか、間違っているかどうかは別として」

「……カズフミ、難しいことを言うの」

「はは、そうかもしれないね。でも、これは正しいことだと思うよ。父さんも良く言っ
ていた」

「……カズフミのお父さんは、どういう人なの？」

「ただのサラリーマンだよ。僕がここにやって来たのも、転勤が理由でね。ちょうど小学
校を卒業したタイミングだったから良かったけれど」

「元々、何処に住んでたの？」

「首都圏の何処か、とだけ言っておこうか。……まあ、そういう点では、クレアの先輩だ
よ」

「先輩？」

「転校した先輩ってことさ。まあ、僕の場合は、タイミングが良かったただで特段大変な
ことはなかったんだけれど」

僕の家があるマンションの前に到着する。

マンションの前には交差点があつて、裏道になつてゐることからそこそこ交通量がある。だから信号は守らないといけない訳だし、守らなかつたら罰則もあつたりなかつたりする訳だ。マンションの前に立つて、僕は踵を返す。

「もうここまで来たら問題ないよ。クレアも、急いで家に帰つた方が良くないかい？」

「……そう言われると、その方が良く気がしてくるの」

クレアはたつたつたと走つて、横断歩道を渡る。そこで振り返り、僕の方を見る。彼女はぶんぶん手を振つていた。恥ずかしい、と思つてしまうことだったけれど、彼女のことを考えるとそこで無視してしまうのも申し訳ない。だから僕も少しだけ照れくさそうにながらではあるけれど、手を振ることにした。

「じゃあね！ カズフミ。また明日、会おうね！」

「クレアこそ、また明日会おうな」

それぞれこう叫んで、僕達は向かい合う。ちょうどそこで赤信号になり、ちょうど止まっていたトラックが動き出す。トラックの荷台でクレアの姿が見えなくなる。この瞬間、まるでシュレーディングの猫状態に陥る。

要するに、こちらから観測出来ないのだから。

クレアが存在しているか存在していないか、というのは分からない状態にある、ということだ。重ね合わせの状態、と言えば良いだろうか。僕はどちらだろうか——と思い、クレアの姿が見えるようになるのを待つ。トラックが移動し終わるまで数秒しかない。だから、別段気にすることなんてないのだ。その間、クレアがどういうことを考えているんだろうな——なんてことを考えている暇すら与えられず、僕の視界からトラックが消失した。

そして、同時に、僕の視界からクレアが消失しているのを確認出来た。つまり——クレアは魔法を使って帰って行った、という訳だった。魔法使い——なんと自分の常識を容易に覆す存在なのだろうか。僕はそんなことを思いながら、またシニカルに微笑んで、マンションの入口へと入っていくのだった。

<Magic-girl Strikes!> is Happy End.